

英語で大学が亡びるとき

寺島 隆吉著

現在、文科省は「スーパー・グローバル大学」と称する、言ってみれば全国的に有名なごく一部の大学に膨大な補助金をつぎ込んでいる。

先日、こうした大学の体面担当教授と会ったところ、彼は授業を英語ですることになり、外国人留学生といってもほぼ全員東南アジアで、日本人学生と同じくらい英語が不得手であり、どうやって英語で教えてよいやらと頭を抱えていた。

本当に文科省はこのまま突っ走るのだろうか。どうしてグローバル化＝英語化でなければならないのか。大学上層部の叱咤激励する「英語力＝研究力」「英語力＝経済力」「英語力＝国際力」という主張は正しいのか。

本書によると、先ず「英語力＝研究力」について、英語を話せない益川敏英氏がノーベル物理学賞を受賞したのをどう説明すべきか。また、2010年のノー



直結しない「英語力＝研究力」

ベル化学賞を受賞した鈴木章氏や根岸英一氏は終戦時にはそれぞれ15歳、10歳。いま流行の「小学校英語教育」などを受けていなかった。しかも中学校で初めて習った英語は「英会話」ではなかった。これだけでも「英語力＝研究力」は全く根拠のない空論である。

研究力を付けるには、先ず母国語で論理的に考える「国語力」、次に必要なのは「数学力」なのである。つぎの「英語力＝経済力」も、英語を母国語とするアメリカの現在の高い失業率、1%富者と99%の貧者といったアンバランスを生み出す経済力からはアメリカは理想の国とはなりえない。そして「英語力＝国際力」も、アメリカ一辺倒の世界観・価値観に基づく視座の狭窄を引き起こしかねない。

日本以上に幼いうちから英語教育を徹底している韓国も反省している。「韓国日報」は、「日本がノーベル賞を取れるのは自国語で深く思考できるから、我が国も英語ではなくて韓国語で科学教育を行うべき」と提案した。同様な反省の弁がインドでも出始めていると聞く。

明石書店
本体2800円＋税

法政大学名誉教授・

川成 洋